

第3回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時 平成22年2月22日(月) 10:00～12:00
会 場 仙台市役所2階 第五委員会室
出席委員 大滝精一委員長、江成敬次郎委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、西大立目祥子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [7名]
欠席委員 庭野賀津子委員 [1名]
オブザーバー 大村虔一総合計画審議会会長
仙 台 市 企画市民局次長、総合政策部長、総合計画課長
次 第 1 開会
2 議事
(1) 新基本構想の策定方針について
(2) その他
3 閉会
配付資料 資料1 第3回起草委員会 論点ペーパー
資料2 都市像等の変遷と新しい基本構想におけるキーワード(案)
資料3 都市像イメージ図

会議の概要

開会

議事

(1) 新基本構想の策定方針について

・大滝委員長から資料1、資料2及び資料3を基に説明し、その後、意見交換を行った。

<主な意見等>

- ・10年前の総合計画というのはクローズドなシステムで、その中できれいに完結しているが、これを、市民力を特徴としたオープンシステムに変換していかなければならないのではないか。今後に向けて新しい戦略・戦術を考えることは、すなわちシナリオと組織体制をどうするかだが、そのとき、市民力をどう活用していくのかという論点に入っていくのではないかと。また、クローズドからオープンへ持っていくためには交流をもっと強く促進していく必要がある。
- ・人口の問題とアジアとの関係の問題は、新しい我々の構想の中で発展、アピールしていくポイント。高齢化の問題、教育の問題、コンパクトシティーの問題は、我々のアイデンティティをどうつくっていくのか、仙台の魅力をどう発信していくのかという問題。
- ・この4つの柱は前の計画の居抜きだが、戦略とか戦術を組み込んで中身を変えていけばおもしろい話になっていく。その限りで、市民の声の聞き方という意味では、市民の声

とか市役所の考えがお互いインターフェースがとれるような、第三者の組織なりを立ち上げていく必要があるのではないか。

- ・「市民が動くまち」という表現を都市像に入れたらいいのではと考えていたが、資料を拝見し、これからの基本構想をつくるときに、都市の土壌、いわば土を育てるようなところに市民の力を位置づけるというのは、とてもいいのではないか。
- ・一方で、ここでいう「市民」とは誰なのか、きちんと考えていく必要がある。ここ 10 年ぐらいで地縁型だけでは解決できない地域の課題が顕在化している。そうするとやはり、地域と N P O との活動がクロスする。しかしながら、そういうことが仙台ではまだほとんど行われていない。
- ・本当の意味での市民協働ということを考えると、市役所自体もオープンマインドにならないと困る。職員一人一人が市民と一緒に活動するという考えなり行動なりが必要。「行動する市民力」イコール「行動する市役所職員」でもある。また、行動する市民を育成するのは市民であり行政である。そこをどう育てていくかについてはもう少し踏み込んだ議論が必要。
- ・市民力という主題自体すごくいいなと思うが、やはり鮮明にしておきたいのはその市民というのは誰なのかという点。同じ住民であっても、学生であったり、事業所で働いていたり、N P O、ボランティアその他で働いている方もいる。市民には皆含まれていると意識づけることによって、そこから続く協働や役割、市民力のはぐくみなど、テーマがより鮮明になってくる。実際には半分ぐらいの人口の人は何らかの働きを持っている。そのことを意識すべき。
- ・経済界から見ていい協働の事例として、一昨年のデスティネーションキャンペーンが挙げられる。観光のキャンペーンで行政がリードしたプログラムだったが、いち早く経済界や市民の方々への参画の呼びかけがあって、それを主体的に受けとめて進めていく中で、一般の市民にまでそれが浸透して、単なる観光業界のお定まり事業ではなく、非常に大事なまちづくりの取組になっていった。そういったものを是非参考にして、協働やはぐくみというものの中身を考えていきたい。
- ・これまでの議論の中で共通して出された市民の役割とか位置づけなどについて、土壌を育てる、4 本の木を育てるというところに位置づけられているのは基本的に賛成。これからの 10 年は、いろんなパターンで市民の力をつけていく期間と位置づけて、その成果や問題点をどう活用していくか、そうした仕組みを考えていくことが必要。
- ・この総合計画に一体何が求められているのか。やはり役に立つ総合計画でなければいけないことは認識できた。そこで、ただの憲法ではなくアクションプラン型の総合計画とするには具体的には何が変わればいいのか。人口減少とかアジアとの交流というのは簡単には変わらないが、行政のあり方とか、N P O との協働のテンプレートとか、そういうことは多分変えられる。何かプロジェクトベースでそれをフィードバックできるような行政の展開や、大学、市役所、N P O、市民というあたりのインターフェースなり外部組織の構成なりがうまくいくようになるといいのではないか。
- ・資料 3 を見ると、起草委員会で議論されているダイナミズムがないのではないか。関連するキーワードで切り取るときに、構造自体をもう一回引っ張り出すような軸の立て方

というのはできないだろうか。(図を指しつつ)左側はコミュニティ、右側は都市、上はアクティビティー、下は自然、のように。

- ・「行動する市民力」を掲げて、それがドライビングフォースになって変化を与える。杜の都の話は仙台のアイデンティティーになるが、単に自然だけではなく、文化、経済、人材を含んだ幅広いアイデンティティーの話として位置づける。世界・未来に対しては、アジアとか世界とか次世代とのインターフェースとして書き、安心して生活できる都市としては、生活基盤とか地域福祉力のなどの、地味だが非常に大事な話として書く。
- ・ただし、このような書き方をすると、同じ事業が都市像のあちこちにぶら下がり、どこに該当するか判別できなくなり、大変だと思う。現実的に無理なのであればはっきりとそう言ってもらい、あきらめさせていただきたい。
- ・一方で、結構リスクなのかもしれないが、最初に策定の趣旨のところではっきりと、縦割りをやめようみたいな話を書いてもいいのではないかと考えている。
- ・21世紀型市民というのは、自分たちのことをできる限り自分たちで考えてやっていくというのが基本。課題はあるものの、いろんな活動をやっている団体等があるので、結構人材は育ってきているのではないかと。それらが市内、県内、県外、それからもう少しグローバルにつながっていくということも大事だし、そうしたネットワーク形成を進める意味でも、コーディネーターの育成が大切なのではないかと。
- ・市民とともに協働で取り組むことを考えると、その目標を立てるのが行政だけではなくて、市民にもわかりやすい目標、あるいは市民自らが参加して目標をつくり、その目標が達成できるかどうかは、もっとわかりやすい指標で、みんなが進ちょく状況を把握できる仕組みを何かつくりたいといけな。
- ・今、市民が抱える問題を周知し、それらを、行政あるいはNPOが、どんな問題がどんなふうにあるのかといったことを知らせていって、幅広く知りながら意見を出していく市民の数を増やすことがとても大切。最近はコンピューターのネットワークがどんどん進んでおり、若い人同士にとってはそういった情報を提供しながら意見を集めて正確な意見を考えさせていく仕組みはとても重要になってくる。「行動する市民力」を引き出す力というのがその辺にあると思う。
- ・市民側が何かをやろうとすると、行政の枠組みとは随分違う目線で物事をとらえるわけで、何か発言すると幾つかの部局にまたがってしまうような話が出てくる。そういったものをまとめる仕組みが行政側には必要になってくる。その辺がかなりキーになるのではないかと。
- ・つい最近まで仙台にあった都市総研のような学術的なものではなく、もっと市民の目線に立った研究員を少し配置して、そしてそこにいろんな人たちが参加できるようなプラットフォームを考えていくというやり方がある。併せて、定量化できるものについては数値目標化をしていくということを言っておいたほうがいいのではないかと。例えば、生活保護世帯を何年後にはこのくらいまで減らしますとか。また、人口のシミュレートについては、全国的に見ても仙台は人がものすごく動く。学生もよく動く。仙台らしさを出すには、こうしたファクターも考慮しておかなければならないのではないかと。
- ・資料3の図は、役所の人たちが見たような整理の仕方という感じがする。ただし、実行

可能な妥協、肯定的な妥協という意味では了解しているが。

- ・再開発計画のプロジェクトをお手伝いさせていただいているが、そこで感じるのは、そういうプロジェクトベースでやるときのパブリックインボルブメントの仕組みは、是非仙台市でも先駆的に取り入れたらいいのではないかと。2点目は、ただNPOを活用するといっても財政的な裏づけ、アウトソーシングの枠組みがなければ意味がないということ。3点目は、既存の町内会は限界がある組織ではあるが、きちんと地域に根付いており、非常にしっかりとしたボランティアな活動をされている会長さん方がいるので、そういう既存の資源とどう結びついていくのかが非常に重要になるということ。
- ・コーディネーターは膨大な人数が必要。仙台は民度が割と高いから、町内会の会長さんもいろいろよくわかっておられる。ただ、これだとあの人は言うこと聞いてくれないなど、調整が難しいことも多い。そういう意味でコーディネーターの活躍や、NPOの本気の活動が必要。その辺を行政がどこまでサポートできるかというフェーズに、もう仙台は来ているような気がしている。
- ・今のような話は大変重要。具体的な政策のところで考えていくことでよいのでは。
- ・行政システムと市民の目線をうまくつないでいく、コーディネーターが、かなり大胆に行政システムの中にかかわりを持って、そこでうまくつないでいく。恐らくそのくらいのことは今度の総合計画の中に書き込まないといけないのではないかと。具体的に何をやるかという話はまた別問題として。
- ・地下鉄東西線は、コンパクトシティという表現の中でやんわりと記載することになると思うが、生活コストや生産コスト、ビジネスコストを圧縮する効果がある旨をどこかで強調したほうがよい。通勤が便利になり、駐車場を節約できるので、コールセンターのような事業所が張りつく。通常は行動範囲に限られる高齢者でも、地下鉄を使えば一番町まで買物に行ける。もっと生活者目線からのコンパクトシティのよさを訴えていくのがよいのではないかと。
- ・地下鉄（南北線）をつくる时候にも、地下鉄の話だけではなくまちづくりとリンクしたものにするという話で始まったが、そのときの雰囲気とその後は随分違っている。その後は市民といっても、その地域の地権者との話しかなくなってしまふ。それは行政のシステムだとか、いろいろ問題があるからだと思う。
- ・プロジェクトベースになると、問題意識としてそれぞれのステークホルダーは、短期経済をどう最大化するかというゲームをやってしまう。そのゲームをいかに解消するかが、恐らく行政に求められている役割。それは啓蒙するだけでは足りず、最終的にはコーディネーターの粘りや、どうやってコネクションするかという仕組みだと思う。
- ・多分、都市計画関係の部局としては、見た目が派手な市民参加は攪乱要因以外の何物でもないはず。「今度市民参加するからそれでどうなるかわからない」と言ったら、だれもそんなリスクがある案件には出資せず、皆が損する仕組みだから誰もやらない。そのリスクを誰かがとる必要があって、それは行政がある部分のリスクをとる必要があるのでないか。
- ・現場で鍛えられて思うのは、本当に支援する枠組みがない。現場は本当に悲惨。地域で頑張っている人々にきちんとエネルギーを供給して、啓蒙ではなく冷静な仕組みづくり

を行い、ちゃんとリスクヘッジできるような仕組みを行政体が持つべき。

- ・同じようなことが東北でも起きている。例えば新幹線が今度青森で 12 月開業するが、関係者は、今回の新青森開業で、割合では函館だろうが、絶対量でいったら仙台、東京間が圧倒的に伸びると見ている。でも、新青森開業というのは北東北あるいは青森県かせいぜい青函ブロックの固有なテーマに見られている。非常に矮小化されている。セントラル自動車と秋田港を結ぶシーアンドレールもそう。それらは地域固有のものではなく、やはり東北全体のものであり、しかもそれをリードすべき仙台的な経済界なり行政なりの役割は非常に大きい。東北 6 県といっても、県同士は対等であり、発展性だとかダイナミズムが全然出てこない。それをどのように東北全体としてとらえて、どう生かし、そこを契機にどう描いていくかという視点が大事。
- ・仙台に是非中国の総領事館を置いてほしいという要請に県、市の方々と行ったときに、外事のナンバー 2 で出てきた方が、留学生だが東北大卒だった。紹介されるまでわからなかった。人のつながりだとか、知の学、知のつながりとかいうものを大事にしてこなかった結果だ。この延長線上では将来の姿はたかが知れたものしか描けないなということとを非常に反省させられた経験である。
- ・人の多様性が保障されているところが仙台の魅力だが、人材をきっちと地域の中に引きずり込むような積極的なアクションがなかったし、育てるだけではなく、人材をうまく活用して成果につなげていくようなシナリオづくりもやってこなかった。このことを正面にとらえていくと、人、NPO、ボランティア、コーディネーターがどう動き出すべきなのか、見えてくるのではないか。
- ・仙台は、本来 100 万市民がいて、背後に東北があれば、港も空港ももう少し活性化して文化的なイベントだとか経済的なイベントだとか、いろんなものが行われて人がやってくるといったような話があっても不思議はない。そうした国際的な動きのようなものが仙台を中心にしてつくっていきけるはずなのだが、その資源を生かし切れていない。
- ・仙台市は、チャイコフスキーのコンクールなど果敢に文化的なイベントを行っているが、そうしたイベントと市民が進めるストリートジャズフェスティバルのような話が、どんな形で市の全体像をつくるのか、なかなかイメージが固まらなかった。そうしたところに課題があるのではないか。空港も、あちこちでいろいろ取り組んでいるが、皆苦戦している。そこで、仙台がしっかりして、仙台空港を他地域の方々にとっても使いやすい空港にするとか、そういう仕組みが必要ではないか。
- ・個人的には、東北 6 県庁所在市の政策会議みたいなものがあって、市同士の身軽さで共通する東北一円の政策課題をしっかりと話し合い、どう取り組んでいくのか、オピニオンなり行政のリードを果たしていくことも、仙台市には求められるのではないかと思う。
- ・何をやっても仙台一極集中ではないかとよく批判を浴びるが、そうではなく、東北全体のために仙台がお手伝いする、そういう姿勢をどんどん出していくことによって、それが何らかの形で循環したり、仙台にも還流したりして、経済や地域や人のつながりを持っていく構図を、仙台の役割としては意識してやっていくべきだと思う。外への役割についても都市像のひとつではないか。
- ・10 年前と比べて、仙台だけでなくほかの県とか市町村も、そんなに余裕がなくなって

いる。言い方が正しいかわからないが、背に腹はかえられない状況が一方ではあり、切迫感が強くなってきている。そこでお互いに知恵を出していくときに、仙台がイニシアチブを握っていかないと東北全体が沈没してしまうリスクが高まってきている。そういった点をうまく書かないといけない。ストーリーとして。

- ・海外から来られている方々に、我々の都市づくりやふだんの都市経営の中にどうやって参画してもらうのか、プレーヤーとして相互に意見交換ができるのか、そういう位置づけが今までの計画ではなかった。ここは考えていく必要がある。
- ・その点は、大学としても非常に弱いところ。東北大は留学生が1,000人も来ているが、結局そのままスルーして帰ってしまい、あとはわからない状態。
- ・例として、富山県は遼寧省、特に大連と交流があったこともあり、大連にいる富山大学の卒業生は大体組織化が終わっている。弁護士から医者まで様々いる。富山の企業が進出したときに、全部卒業生がサポートに入ってくれて安心感がある。そうすると、中国の企業が、日本に投資する場合や企業を進出させる場合に日本のどの都市を選ぶのかという場面で、現地で組織されている留学生の卒業生たちが活躍してくれる可能性が大分高くなる。将来に役立つ仙台の受皿づくりという点で考えていく必要があるのではないかな。
- ・高齢化社会というとお年寄りのことがかなり話題になるが、その対極として少なくなった子供たちの問題はあまり議論されることはない。都市像の中の未来を築く学びの都という、やはり東北大などの大学というイメージが非常に強い。しかしながら、次の世代の子供をきちんと教育することも、学都のひとつの柱として位置づけることが非常に重要ではないか。
- ・子供が市民かどうかについては、実はなかなか悩ましい話である。日本では市民的には扱わない風潮があり、実際、あまり本質的に子供の声を聞くことはしていない。子供達が、小さいころから仙台に育って、しかもとてもいい教育を受けたと自ら思い、ある程度年をへて、仙台で何かお手伝いできるなろうと思う。そういう思いがつながるようにしたいと思う。
- ・資料の中に仙台に住まう誇りと大きく書いてあるが、やはり地域に愛着がわかないと誇りは持てないし、そこには小さいときの経験が大きく影響するのではないかな。そういう意味では地域学習のようなことも大事なのではないかな。
- ・東北地方の状況として、東北の町や村に出向くと、数は少ないものの、課題を先取りする形で住民の方たちが自らの力で自らのことは解決しようという動きがすごく活発になっていると感じる。これは、仙台ももっと学ぶべき。子供を育てるフィールドは何もこのまちだけじゃなくて、東北の農山村の環境も活用できる。
- ・自分の子供の教育を見ていると、仙台でも地域に関する学習は一生懸命やっていると思う。地域教育の問題は、コミュニティとの連携が非常に必要で、他部局との連携面で、より先進性を生かすようなことを行ったほうがよいのではないかな。

(2) その他

- ・事務局から今後のスケジュールについて説明。